

教師・学習者立場逆転型タスクの試み  
—学習者を一社会的存在とみなす CEFR 理論背景に基づいて—

渋谷順子、井上玲子

近年、欧州の外国語教育分野では、CEFR に基づく指針の提示が求められるようになってきた。本大学でも 2004 年度よりこれに基づき、シラバス・カリキュラムの大幅な改編を行ってきた。

本大学日本語科は 6 セメスター制(3 年間)の BA(学士)コースとなっている。口頭表現のクラスでは、1 セメスターから 3 セメスター(初級)までは既習文型を用いたロールプレイ中心の活動、4 セメスター(中級)以降はグループワーク中心のタスク達成型(ロールプレイ、即興等)の活動を行い、自律学習能力、問題解決能力、および協働学習スキル能力の育成を目指している。

シラバス改編前の教室活動では、本大学でも学習者(言語的弱者)を救うのが教師(言語的強者)の役割であると考えられる傾向が強かった。奥村(2008)は、CEFR が考える言語学習者について、「学習者を目標言語の未熟な使用者ではなく、ある目的行動のためにその言語を使用する社会的存在」と要約している。我々はこれを受け、タスク達成型活動の内容として、学習者がドイツ滞在歴の短い日本人教師にドイツ事情を日本語で説明したり、助けたりするといったタイプのタスクを取り入れるよう工夫している。こうしたタスクにおいては、学習者が既知情報の発信者、教師が新情報の受け手となり、教師が学習者に救われるという、従来とは逆の立場に立つことになる。学習者の既有力がエンパワーされる学習空間が作り出せるのである。

このような活動から、「自信やモチベーションの維持・促進」、「語彙や表現の定着度の高い獲得」、「対人コミュニケーション能力の獲得」、「言語的な間違いに対する心理的不安の緩和」といった様々な学習効果が伺えるようになった。

本発表では初級から中上級への橋渡しの段階、すなわち基礎段階の言語使用者(CEFR A1-2)から自立した言語使用者(CEFR B1-2)への橋渡しの段階と我々が捉えている 4、5 セメスターでの実践を中心に発表する。